

多様な参加者が価値を 実感できる学会へ



大阪大学
森田 浩

学の側に身を置く者として、本学会の意義と今後の方向性について、改めて考える機会をいただいたことを大変光栄に思っております。

本学会の役割は、産業界と学界のそれぞれの発展に寄与することであるとは言ってもありません。しかしながら、より本質的に重要なのは、両者を「つなぐ場」として機能することであると考えています。産業界には経営者だけでなく現場で日々実務に向き合うスタッフが存在し、学界においても研究者のみならず、将来を担う学生が重要な構成員です。それぞれの立場や役割によって求めるものは異なりますが、これまでの学会活動を振り返ると、どちらかといえば経営者や研究者といった層に重きが置かれてきたように感じています。今後は、より多様な参加者が価値を実感できる学会であることが求められていると感じています。

研究発表会は学生も多く参加する行事ですが、学会全体として多様な関わり方を提供していくことが重要です。参加者がそれぞれの立場に応じて価値を見出せる複線的な取り組みが求められます。たとえば、問題解決コンペティションなどによる実際の課題に向き合いながら議論を深める機会は、学生や若手技術者にとって学びの実感を伴う貴重な場となりますし、現場の視点を共有することで産業界の参加者にも新たな気づきをもたらします。

さらに、産業界における具体的な取り組みを学生に向けて紹介する場を充実させることも重要です。実務の現場でどのような工夫や挑戦がなされているのかを知ることが、学生にとって将来像を描く上で

大きな意味を持ちます。品質管理の面白さを体験的に理解してもらう企画は、これまで接点の少なかった層の参加を促す契機にもなり得ます。

同時に、立場を超えた自由な情報交換の場においては、形式的な発表だけでは得られない相互理解や信頼関係が育まれます。こうした多様な機会が相互に関連しながら機能することで、学会は単なる知識共有の場を超え、継続的な学びと協働を生み出す基盤となるはずです。

参加費については、本学会は他の学会と比較して特段高い水準にあるわけではありませんが、重要なのは費用の多寡ではなく、それに見合う価値を参加者に提供できているかという点です。実際、参加費が高額であっても多くの参加者を集めている学会は存在します。それは、参加することで得られる知見や人脈、経験に対する期待が大きいからにほかなりません。本学会としても、参加者一人ひとりが「参加してよかった」と実感できる場づくりを進めていく必要があります。

これからの学会は、これまで積み重ねられてきた経験と知見を基盤としつつ、それを次の世代へと確実に引き継ぎ、さらに発展させる責任を担っています。多様な立場の人々が自然に交わり、互いに刺激を受けながら新たな価値を創出していく環境を整えていくことが不可欠です。産業界と学界、世代や立場の違いを越えて知が循環し続ける場をはぐくんでいくことが、本学会の目指すべき姿ではないでしょうか。その実現に向けて取り組んでまいりたいと考えております。